

氏名	闫琳	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文学	
学位授与番号	博甲第 6004 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	在日外国人留学生を対象としたアルバイト動機づけに関する研究	
学位論文審査委員	教授 堀内 孝 准教授 堤 良一	教授 藤井 和佐 准教授 齋藤 圭介

学位論文内容の要旨

本論文は在日外国人留学生のアルバイト活動に着目し、自己決定理論に基づいて、留学生のアルバイト活動をめぐる諸問題について検討したものである。第 1 章では、在日外国人留学生の多くがアルバイト活動に従事している現状が示され、留学生のアルバイト活動に対する研究が不可欠であることが指摘された。第 2 章では、動機づけの観点から在日外国人留学生のアルバイト活動について検討するため、動機づけ現象全般に関わる新しい理論である「自己決定理論」に着目し、その理論の研究経緯および 6 つの下位理論について説明がなされた。第 3 章では、自己決定理論における有機的統合理論に立脚することにより、在日外国人留学生を対象としたアルバイト動機づけ尺度の開発が行われた。因子分析を行った結果、アルバイト動機づけ尺度は「内発的調整」「統合的調整」「同一化的調整」「取り入れ的調整」「外的調整」の 5 つの下位因子から構成されることが示された。第 4 章では、第 3 章で開発したアルバイト動機づけ尺度の因子的妥当性について、確認的因子分析を用いた検討が行われた。有機的統合理論に基づく理論的検討および先行研究、探索的因子分析、二次因子分析の結果に基づいて、6 つのモデルが想定された。確認的因子分析を行った結果、アルバイト動機づけ尺度が 5 因子構造を有することが確認され、さらに、「自律的動機づけ」と「統制的動機づけ」という 2 つの高次因子の存在が確認された。第 5 章では、アルバイト活動における職務満足感に着目し、職務満足感に影響を及ぼす一連の心理プロセスについて検討が行われた。その結果、基本的心理欲求における関係性欲求と有能感欲求の充足が直接的に職務満足感を高め、アルバイト活動において基本的心理欲求の充足が適応的な状態をもたらすことが明らかとなった。また、3 つの心理的欲求を充足させることによって、自律的な動機づけが高まることから、職務満足感に対

する基本的心理欲求の間接的効果も期待できることが明らかとなった。さらに、関係性欲求の充足から有能感欲求の充足への正の影響、有能感欲求の充足から自律性欲求の充足への正の影響が見られたことから、アルバイト活動において関係性欲求の充足の重要性が示唆された。第6章では、在日外国人留学生のアルバイト活動について検討した結果を総括し、本研究で明らかにした点、本研究が有する問題点、および、今後の課題について考察がなされた。

学位論文審査結果の要旨

本学位審査会は、平成31年2月13日(水)の9:00からマルチメディア室に於いて実施された。審査会の冒頭に、本論文の概要についてPowerPointを使用した30分程度の説明を冨琳さんが行い、続けて、4名の審査委員からの質疑が行われた。

堤良一教員からは、最初に、本論文が全体的にすっきりとした読みやすい論文であるとの評価が述べられた。次に、本論文では自己決定性の高い動機づけの存在が確認されたことから「留学生はアルバイト活動自体に楽しさを感じている」と考察しているが、日本学生支援機構(2014)は「留学生の約7割が生活維持のためにアルバイトしている」と報告しており、両者の相違についての説明が求められた。冨琳さんからは、本論文は日本学生支援機構(2014)より中国人比率が高く、本研究の結果が中国人留学生の特質をより強く反映している可能性が指摘されるが、それに加えて、この数年で出身母国の経済状況が著しく向上しており、アルバイト活動に対する意識が変化した可能性があるとの回答が得られた。

藤井和佐教員からは、以下に記す評価と改善点が指摘された。予備審査結果に応える形で、真摯に修正努力がなされたことわかる論文であり、外国人材の受け入れという現代的課題への論及は研究の社会的意義にもつながる。このような研究者としての姿勢及びテーマの時宜性を評価する。また、これまでの研究にはない尺度の作成、分析結果から得られた新たな知見など学界に貢献する部分も大きいと考えられる。しかしながら、学説史上への位置づけ方が控えめであり、説明不足の箇所も散見される。このことに対しては、伝えたいことをどう表現するかという文章作成上の困難があったようであるが、口頭審査においては適確な説明がなされたことから、このことは文章精緻化というテクニカルな部分の課題であり、本論文の価値を下げるものではない。

齋藤圭介教員からは、分析手続きと留学生一般へのモデルの適応、そして外国人留学生をとりまく法制度からの影響についての質問がなされた。冨琳さんからは、モデルについては今後も発展的な見直しが必要であり、また、法制度に関わる留学生のアルバイトの実態を把握するためには調査に工夫をする余地があるとの回答がなされた。

堀内孝教員からは、本論文は調査データをもとに因果パスモデルを構築しているが最終的に因果関係を確定するにはどのような追加手続きが必要か、また、モデルが射程とする従属変数は職務満足感だけで十分なのか、という二点について質問がなされた。冨琳さんからは、因果関係の最終的な確定に関しては時間変数を組み込んだ遅延交差モデルを適用して厳密に検証する必要があり、また、従属変数としては職務満足感のような適応指標だけでなく、ストレスや疲労感のような不適応

指標の設定も今後の研究では重要になるとの適切な回答が得られた。

本論文は頁数こそ少ないものの、『心理学研究 (5 章)』と『パーソナリティ研究 (3 章)』という日本を代表する査読付き論文 2 本を主たるコンポーネントとして構成されている。本論文で提示されたモデルは、留学生のアルバイト活動だけでなく、学習や友人関係などに関する動機づけ現象全般に拡張できる可能性を秘めており、そのインパクトも大きいと考えられることから、本として公刊するに値する学術水準にある。プレゼンテーションや質疑応答の姿勢は控えめながら、的確な主張と対応がなされており、闫琳さんの研究者としての資質を感じさせるものである。以上を総合的に鑑み、本学位審査会は全員一致で本論文を博士論文にふさわしい（合格）と判断するに至った。